

南スラウェシの人口移動と性比の変動に関するノート

坪 内 良 博*

A Note on the Population Mobility and Sex-ratio of South Sulawesi People

Yoshihiro Tsubouchi*

This short note deals with some recent features of the migration of South Sulawesi people, including the Buginese, who are well known for their seafaring throughout Southeast Asian history. The major topics covered are as follows.

- (1) Indonesia has high percentages of out-migrants from South Sulawesi, West Sumatra, and Central Java. Among others, the migrants from South Sulawesi show a remarkably high sex-ratio.
- (2) The sex-ratio of the population of South Sulawesi is examined by *kecamatan*. A decreasing sex-ratio is observed in the heart of Buginese region, while in Toraja land, the sex-ratio is little affected by out-migration.
- (3) The aspects of population growth in Kecamatan Bua Ponrang, a frontier area of Kabupaten Luwu, are described for each *desa* or village. The

major items covered are: the starting period of development, changing food patterns from sago to rice, and details of population increase and in-migration.

- (4) The features of Buginese migration since 1964 to downstream areas of the Musi River in South Sumatra are shown. The married men, some of their wives, and unmarried men formed the early-stage population. They were later joined by their dependents.

- (5) Finally, some topics not covered by the present study are pointed out for future research. These include assessment of the social and economic changes caused by the decreasing proportion of males in Buginese villages, and the study of Buginese migrants in urban environments.

I インドネシアにおける 南スラウェシ出身者

インドネシアは一つのほとんど閉じられた人口として捉えられる。しかしながら、その下部単位を構成する各島群、さらにそれを細分する各種族の居住地域は各々の地域的独立性および文化的独自性を強調するものの、決して閉じられた人口単位ではない。このことは南スラウェシ州についても該当する。就

中、同州の主要種族であるブギス族・マカッサル族は海洋民族としての活動によって歴史的に有名である。

1971年センサスにおいては、各州 (*propinsi*) の居住者の出生地が示されている。特定州の出生者数を各州別センサス報告書から抜き出すことによって、当該州出生者の合計と、州外居住者数・島外居住者数を知ることができる。後二者の割合を各州ごとに示すと、表1の通りである。州内出生者中、州外居住者の占める割合は、西スマトラ州出生者において最も高く (10.8%)、次いでジョク

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

表1 インドネシア各州における州内出生者の州外居住状況 (1971)

州 名	州外居住者		島外居住者(内数)	
	実数(千人)	%	実数(千人)	%
アチェ	66 (3.3)		20 (1.0)	
北スマトラ	188 (3.0)		105 (1.7)	
西スマトラ	325 (10.8)		105 (3.6)	
リアウ	42 (2.8)		17 (1.1)	
ジャンビ	27 (3.1)		12 (1.4)	
南スマトラ	199 (6.0)		86 (2.6)	
ブンクル	25 (4.9)		7 (1.4)	
ランボン	30 (1.6)		17 (1.0)	
ジャカルタ	132 (4.6)		42 (1.5)	
西ジャワ	1,193 (5.3)		324 (1.4)	
中ジャワ	1,798 (7.9)		927 (3.9)	
ジョクジャカルタ	267 (10.1)		125 (4.7)	
東ジャワ	750 (2.9)		517 (2.0)	
バリ	57 (2.6)		57 (2.6)	
西ヌサトンガラ	13 (0.6)		13 (0.6)	
東ヌサトンガラ	27 (1.1)		27 (1.1)	
西カリマンタン	35 (1.7)		34 (1.7)	
中カリマンタン	12 (1.8)		5 (0.8)	
南カリマンタン	84 (4.9)		40 (2.3)	
東カリマンタン	24 (3.3)		21 (2.9)	
北スラウェシ	61 (3.5)		45 (2.6)	
中スラウェシ	35 (3.9)		20 (2.2)	
南スラウェシ	276 (4.5)		177 (3.3)	
東北スラウェシ	31 (4.3)		21 (2.9)	
マルク	37 (3.4)		37 (3.4)	
イリアンジャヤ	8 (6.1)		8 (6.1)	

付属小島居住者は島内居住者として扱った。

Sensus Penduduk 1971, Seri E, No.1-No. 26, Table 22 より作成。

ジャカルタ特別区 (10.1%), 中ジャワ (7.9%), イリアンジャヤ (6.1%), 南スマトラ (6.0%), 西ジャワ (5.3%), ブンクル (4.9%), 南カリマンタン (4.9%), ジャカルタ特別区 (4.6%), 南スラウェシ (4.5%) の順となり, 全26州中南スラウェシは第10位に位置する。島外居住者の占める割合をみると, イリアンジャヤ (6.1%), ジョクジャカルタ (4.7%), 中ジャワ (3.9%), 西スマトラ (3.6%),

マルク (3.4%), 南スラウェシ (3.3%) の順となり, 南スラウェシの位置はかなり上昇する。さらに, この中から1971年センサスデータが都市部のみに限られているイリアンジャヤと人口規模が相対的に小さいマルクを除くと, (1)ジョクジャカルタおよび中ジャワ, (2)西スマトラ, (3)南スラウェシという形で, インドネシアにおける代表的な島外移住者を含む三つの地域群がうかびあがってくる。

中ジャワ, 西スマトラおよび南スラウェシ出身者が1971年の時点で都鄙いずれに居住するかを示すと, 表2のごとくなる。南スラウェシ出身者と西スマトラ出身者とは, 州内居住者においては都市村落居住比がほぼ等しいが, 州外に居住する者については南スラウェシ出身者は農村居住者が多く, 西スマトラ出身者は都市がより重要な居住地となっている。この傾向は, 島外居住者についてみると, さらに顕著になる。ここにミナカバウ商人として有名な西スマトラ出身者の出稼ぎ (merantau) とブギス族を中心とする南スラウェシ出身者の開拓者としての移住との対照が示されている。中ジャワ出身者については, 州内居住者においては農村居住者の割合が前二者よりも高く, 州外居住者においては前二者の

表2 南スラウェシ, 西スマトラ, 中ジャワにおける州内出生者の州内外・都鄙別居住状況 (1971)

出生州	州内居住		州外居住 (島外居住内数)		計
	Urban	Rural	Urban	Rural	
南スラウェシ	16.8	78.7	1.6(1.3)	2.9(2.0)	100
西スマトラ	14.9	74.3	7.7(3.4)	3.1(0.2)	100
中ジャワ	9.5	82.8	3.7(0.5)	4.2(3.4)	100

Sensus Penduduk 1971, Seri E, No. 1-No. 26, Table 22 より作成。

表3 州内出生者の居住地による性比 (1971)

出生州	州内居住			州外居住			島外居住		
	Urban	Rural	計	Urban	Rural	計	Urban	Rural	計
南スラウェシ	0.964	0.940	0.945	1.588	1.435	1.488	1.618	1.403	1.483
西スマトラ	0.970	0.922	0.930	1.176	1.505	1.260	1.261	1.641	1.280
中ジャワ	0.934	0.953	0.951	1.107	1.141	1.126	1.172	1.118	1.125

Sensus Penduduk 1971, Seri E, No. 1-No. 26, Table 22 より作成。

中間的な状況が認められる。ただし、島外居住者においては農村居住者の割合が圧倒的に高い。

州外居住者に関して人口構成の観点から興味深いのはその性比である。表3に明らかのように、南スラウェシ出身者の場合には他の2州の出身者に比して、都鄙両方において1.50前後の高い性比の存在がみられる。性比はとくに島外都市部において高い。西スマトラ出身者の場合には、州外農村部居住者における性比は南スラウェシ出身者を上まわるほど高いが、州外都市部居住者の性比は州内都市部に比して高いものの、1.176を示すにとどまる。島外都市部では1.261とやや高くなっているが、南スラウェシ出身者よりはるかに低い。中ジャワ出身者の場合、州外居住者の性比は州内居住者のそれよりも高いが、南スラウェシ、西スマトラ出身者に比してはるかに低く、都鄙差も明瞭ではない。島外居住者では都市部の性比がやや高まり、農村部の性比がやや下落する。このように三つの代表的な州外居住者群を比較した場合、南スラウェシ出身者の州外での生活は、きわだって「男中心の世界」として捉えられるのである。

これら三つの州出身の他州在住者の性・年齢構造をそれぞれについて示すと、図1のようになる。他州都市居住者においては20代を中心とする若年労働力の集中がみられ、老人と子供の少なさが目立つ。このような構造の中で、女子は男子に比してやや低い年齢層へ

の傾斜を示している。農村部においては中ジャワおよび西スマトラ出身者の場合、中心となる年齢が都市よりも高いが、南スラウェシ出身者の場合には都鄙の差は僅少にとどま

っている。すなわち、南スラウェシ出身者においては、都市と農村という居住地の違いによって性比も年齢構造も基本的な相違が認められないのである。

II 最近の南スラウェシにおける性比の変化

インドネシア中央統計局の数値によると、南スラウェシ州の人口は1972年末から78年末に至る6年間に5,294,293人から5,837,945人へと年平均1.64%の増加を示している[Indonesia, Biro Pusat Statistik 1976; 1980]。南スラウェシ州統計書によると、同期間の人口は5,292,085人から5,722,501人へと年率1.31%の増加をしたことになっている[Sulawesi Selatan, Kantor Sensus & Statistik 1973; 1979]。同じ期間にインドネシア全体の人口は、中央統計局の数値では121,367,999人から136,416,487人へと年平均1.97%増加している。また、国連人口統計年鑑は1972年と78年の同国の年央人口をそれぞれ12,564万および14,510万と推定しており、年平均増加率は2.43%に相当する[United Nations 1974; 1979]。資料によって数値が異なるため、完全な推定には面倒な手続きが必要であるが、南スラウェシ人口の自然増加率がインドネシア全体のそれに等しいとすると、年間0.33%ないし1.12%に相当する部分が州外へと流出したことになる。

このような人口流出がすでに示したように

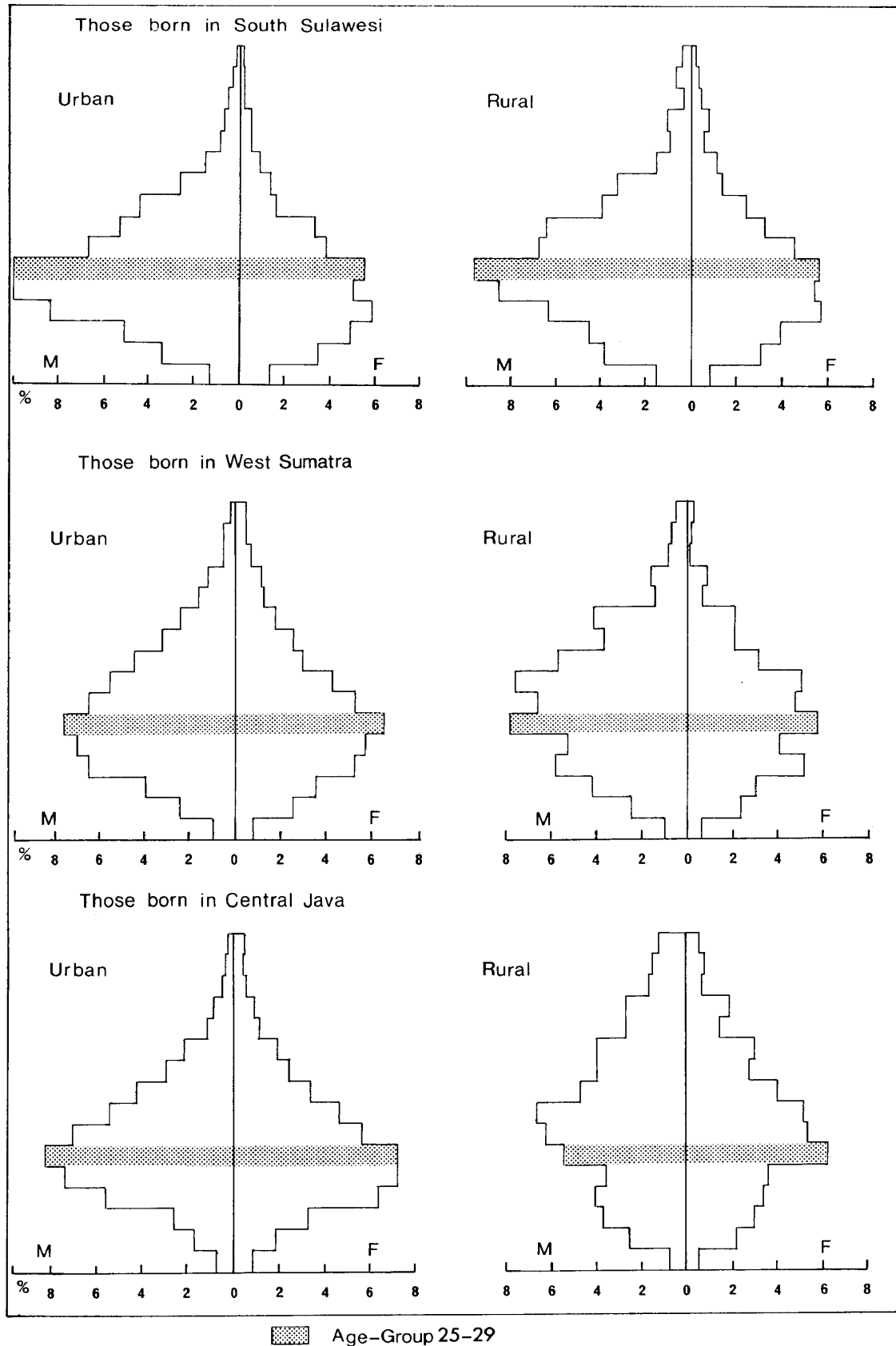


図1 他州在住者の性・年齢構成 (1971)

表4 南スラウェシ州各県の性比 (1972, 1975, 1978)

県 (kabupaten)	1972	1975	1978
Bone	0.905	0.914	0.903
Ujung Pandang	1.058	1.035	0.994
Gowa	0.971	0.973	0.966
Luwu	0.970	0.972	0.945
Wajo	0.905	0.891	0.813
Polmas	0.968	0.955	0.938
Tana Toraja	1.002	1.001	0.969
Bulukumba	0.951	0.927	0.906
Pinrang	0.931	0.902	0.894
Soppeng	1.004	0.953	0.950
Pangkep	0.971	0.935	0.943
Jeneponto	0.964	0.923	0.959
Maros	0.965	0.962	0.964
Sidrap	0.900	0.896	0.825
Takalar	0.971	0.941	0.906
Sinjai	0.957	0.922	0.924
Barru	0.953	0.947	0.890
Enrekang	0.930	0.965	0.893
Selayar	0.958	0.940	0.938
Bantaeng	0.983	0.986	0.944
Majene	0.962	0.975	0.948
Pare-Pare	0.961	0.983	0.926
Mamuju	1.070	0.951	0.996
南スラウェシ	0.963	0.950	0.927

Kantor Sensus & Statistik, Propinsi Sulawesi Selatan, *Sulawesi Selatan Dalam Angka*, 1972, 75, 78各年度版より算出。

男子を中心として行われると、南スラウェシ州残留者の性比は全体として徐々に低下するはずである。実際、中央統計局の数値では、男子人口の年平均増加率1.32%に対して女子の増加率は1.95%、州統計書の数値を用いるとそれぞれ0.98%、1.62%であって、州内の男女の増加率の間には0.63ないし0.64%の差が存在し、中央統計局の数値では1972年の性比0.964に対して78年の性比は0.929、州統計書の数値ではそれぞれ0.963、0.927となっている。

南スラウェシ州の県 (kabupaten) 別

に、1972, 75, 78年の居住人口性比を示すと、表4のようになる。1972年に比較すると78年における性比はすべての県において例外なく低下しているが、72年と75年の間では7県、75年と78年の間には5県で性比の上昇がみられる。この統計に依拠するならば、性比は一様に低下したのではなく、若干の調整過程を経ながら低下したと推定される。この期間の性比の分布をさらに詳しく郡 (kecamatan) 別に調べると、表5のごとくとなる。0.95以上の性比を有する郡が減少し、0.94以下の性比の郡が増加していく過程が明白である。1978年には先行する年次においてみられなかった0.70台の性比をもつ郡が現われる。郡名を記すと、ワジョ (Wajo) 県に属するマニアンパジョ (Maniangpajo) 0.72, サジョアングイン (Sajoanging) 0.77, パンマナ (Pammana) 0.78, マジャウレン (Majauleng) 0.78, タッカララ (Takkalala) 0.79で、いずれにおいても女子人口の比較

表5 性比の高さ別にみた郡の数
(南スラウェシ, 1972, 1975, 1978)

性 比	1972	1975	1978
1.00～	32 (19.5) [%]	22 (13.4) [%]	19 (11.6) [%]
.95～.99	63 (38.4)	59 (35.9)	44 (26.8)
.90～.94	41 (25.0)	47 (28.7)	53 (32.3)
～.89	28 (17.1)	36 (22.0)	48 (29.3)
計	164(100)	164(100)	164(100)

Selayar 県に含まれる5郡を除く。

Kantor Sensus & Statistik, Propinsi Sulawesi Selatan, *Sulawesi Selatan Dalam Angka*, 1972, 75, 78各年度版より算出。

的順調な増加に対して男子人口の停滞が目立ち、とくに前四者については、男子人口は75年と78年の間に絶対的に減少しているのである。

上述の性比の低下とは独立に、南スラウェシ州郡別性比においては、72年には1.50(Ujung Pandang 県 Mamajang 郡) から0.81(Bone 県 Ponre 郡), 75年には1.49(Luwu 県 Nuha 郡) から0.81(Luwu 県 Malangke 郡), 78年には1.18(Luwu 県 Malili 郡) から0.72(Wajo 県 Maniangpajo 郡) に至る大きな分散がある。高い性比を示すのは大都市と開拓前線である。居住環境に関する適当なインデックスが得られれば、このような相反する性格をもつ居住環境を両極に、性比がU字状に分布するものと想定される。トラジャ族を主な住民とするタナトラジャ(Tana Toraja) 県においては、同県を構成する9郡のうち、性比1.00以上を示すものが、72年には5郡、75年には4郡、78年には3郡あって、性比低下傾向は認められるものの、全体としてブギス・マカッサル地域の非都市部よりもずっと高い性比を有する。これを種族差と考えるならば、性比分布と特定のインデックスとの関係づけはさらに複雑となる。

都市の人口増加が自然増を下まわりつつも過去に達成された高い性比をある程度保っているという状況下では、人口増加率の高い地域が高い性比を示すとは限らない。ちなみに1972年から78年までの郡別年平均人口増加率と78年の性比との相関は $r=+0.1684$ に過ぎない。人口増加を示す地域は性比の上昇を示すという仮定は一見正しいように思われる。しかし、人口増加地域における性比はただ上昇を続けるわけではなく、女子人口の流入がそれに続くことによって一度高くなった性比が低下していく調整期が存在するので、人口増加と性比上昇とが同時にみられるのは特定の時期に限られる。ここでは、1976年から78

表6 開発地域別にみた郡別人口増加率と成人性比増加との相関(1976~78)

開 発 地 域	郡 数	相関(r)
I Ujung Pandang	58	-.040
II Pare-Pare	27	-.118
III Watampone	41	+.120
IV Palopo	25	+.277
V Mandar	18	+.590

Iに含まれる県: Gowa, Maros, Pangkep, Takalar, Jeneponto, Bantaeng, Bulukumba, Selayar, Ujung Pandang

IIに含まれる県: Barru, Sidrap, Pinrang, Enrekang, Pare-Pare

IIIに含まれる県: Bone, Wajo, Soppeng, Sinjai

IVに含まれる県: Luwu, Tana Toraja

Vに含まれる県: Majene, Polmas, Mamuju

年の2カ年における人口増加率と成人性比の変化が、マンダル(Mandar)開発地域(Majene, Polmas, Mamuju)の3県を含む南スラウェシ州北部西海岸沿いの地域)のみににおいて、有意な相関($r=+0.590$)を示すことを記しておく(表6参照)。

III ルウ県ブアポンラン郡における人口増加の事例

ブアポンラン(Bua Ponrang) 郡は南スラウェシ州ルウ(Luwu) 県を構成する16の郡の一つであり、1980年末の時点で47,934人の人口を有する。ここでは同郡の村(des)人口を観察しつつ、南スラウェシ州内の開拓前線における人口変動の様相を示そう。

1961年から1980年に至る同郡の登録人口の推移は、表7に示す通りである。1951年から65年に至るカハル・ムザカル(Kahar Muzakkar)の内乱の時期には地方の家はほとんど焼かれ、人々はジャングルにひそんだり、都市に居住したりしたといわれ、この時期の統計は政府が掌握できた人口に限られている。この期間には戦闘そのものによる死亡もあっ

表7 Bua Ponrang 郡の人口 (1961~80)

年 次	年央人口	年末人口
1961	5,557	
62	9,316	
63	16,452	
64	16,786	
65	22,200	
66	22,631	
67	22,677	
68	23,145	23,728
69	23,749	24,734
70	27,968	
71	29,184	29,199
72	31,314	31,313
73	32,277	32,287
74		33,299
75		34,242
76		43,670
77		44,536
78		45,825
79		46,254
80		47,934

年央人口はLuwu 県、年末人口はBua Ponrang 郡の登録人口資料による。

たが、ジャングル生活では脚気、マラリアを患った者が多く、多数の子供が死んだという。1965年は人々が帰村した時期に相当し、64~65年の増加率32.3%はこの状況を反映するものかもしれない。その後顕著な人口増加がみられるのは1969~70年（年央人口）の17.8%および1975~76年（年末人口）の27.5%である。統計の示す数値が正しいとすれば、移動人口は恒常的な率をもってではなく、二つの大きな波となってこの地域に入ったということができる。

ブアポンラン郡は図2に示すように12の村から構成されるが、人口増加はすべての村で均等に生じたわけではない。同郡の中心的集落ブア（Bua）は、同郡内ではルウ地域の首邑パロポ（Palopo）に最も近く位置するが、このブアから遠ざかるにつれて、また海岸か

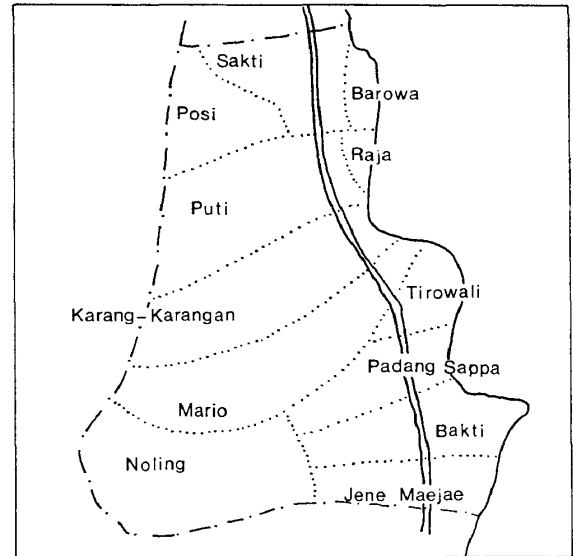


図2 Bua Ponrang 郡略図

ら離れた内陸部にむかって開拓者が入り込んで、水稻、陸稻、とうもろこし、大豆などを耕作し、伝統的な主食であったサゴの重要性を次第に低めている。以下、各村の人口変化の状況を簡単に記述する。

(1) サクティ村 (Desa Sakti)

中心集落ブアは昔日はルウ王国の第3王子の支配下にあったといわれる。同集落はオランダ時代は10個の集落 (kampung) から成る District Bua の中心であった。内乱時には村落部の家々は叛徒に焼かれ、1955年から60年にかけては離村者が多かったが、65年には40%ぐらい帰村したといわれる。1967年に地方行政の改変があり、三つの集落で現在の村を構成することになった。現在ではサゴと米の消費が半々となったが、人々はなおサゴを主食と考えている。離村傾向は全体的に低く、住民は土地にとどまることを好むというが、1975年末から人口流出にともなう人口停滞が始まり、1978年以降人口は僅かながら減少傾向を示している。村の総人口は、1970年8月3,504人、1978年末3,954人(ピーク時)、1980年末3,812人。

(2) バロワ村 (Desa Barowa)

オランダ時代には District Bua に含まれていた海岸地域で、1967年にバロワ村となった。旧名はマロワ (Marowa, 人が多いの意) で、ルウ王国へのイスラームの上陸地として知られる。住民の多くは漁業に従事し、サゴ、ココヤシへの依存度も大きい。現在、魚は養魚池でも飼養する。稲は全く耕作せず、すべて購入に頼っている。1950年の人口は842人。1953~65年の間は村は焼かれて無人となり、住民はジャングルや、ブア、パロポ、ウジュンパンダン (Ujung Pandang) などの町に移住したが、1966年以来帰村した。1967年人口は1,316人、その後人口は徐々に増加を続け、1980年末には2,172人に達した。離村者は年20人ぐらいあるが、主としてウジュンパンダンへ出る。ジャングルに入って開墾に従事する者はない。

(3) ポシ村 (Desa Posi)

サクティ村の内陸側に接し、三つの集落より成る。住民は土着の者に加えて、1965年ごろからタナトラジャからの開拓者が加わり、水田、丁字園などを開いており、現在総人口の40%を彼らが占めている。1967年からソッペン (Soppeng)、ボネ (Bone)、スラヤル (Selayar) からブギス族が移住し、その数は20世帯ほどある。住民の主食は伝統的にサゴと米であった。1940年代に開かれた水田もあるが、新しい水田は1965年以後に開かれた。住民はこの時期にジャングルから村へもどってきたのである。1966年ごろから米がサゴよりも主食としての重要性をもつようになった。1968年の人口は1,131人、1973年および77年に一時的な減少を示すが、1980年末には1,911人に達する。1966年以後マレーシアのサバ州へ出稼ぎに行った青年が約50人いるが、現在ではサバへの出稼ぎ者はない。

(4) ラジャ村 (Desa Raja)

バロワ村の南に接する海岸沿いの村で三つの集落より成るが、その中の一つカンボン・バル (Kampung Baru) は1960年ごろ設立された新集落である。内乱時には村は焼かれたが、住民は1958年ごろから帰村し始めた。住民の60%は漁業、40%はサゴ採取および畑作に従事している。5年前から養魚池が始められた。水田は1930年代から25haぐらいあるが、面積は拡大していない。主食はサゴ50%、米50%である。登録人口は1968年1,789人。1971年および1976年の若干の人口減少の年を含みつつ、1980年に2,288人となる。60年以上前からスマトラのジャンビ州へ行き、水田およびココヤシ園を営む者があった。また、船乗りとしてカリマンタン、ジャカルタへ行く者もあり、現在出稼ぎ者は約100人を数える。

(5) プティ村 (Desa Puti)

ラジャ村に接して内陸部に広がり、道路沿いの三つの集落より成る。主食は以前はサゴ90%、米10%であったというが、現在ではサゴ50%、米50%となっている。水田の古いものは1920年代にすでにあったという。内陸部には1965年ごろからタナトラジャの入植者25世帯が入り水田および陸稲畑を開いている。また78年から79年にかけてマカッサル (Makassar) およびマロス (Maros) から15世帯、ソッペンから3世帯のブギス・マカッサル族が来住したが、彼らは材木伐採に従事し、一時的に滞在したに過ぎない。この村からの出稼ぎ者としては、15人の若者がカリマンタンで石油公社プルタミナおよび木材関係の仕事に従事するほか、ジャカルタで船乗りになっている者が若干ある。

(6) カランカランガン村 (Desa Karang-Karangan)

オランダ統治時代に現村長の祖父母たちによって開かれた。集落は以前は海岸部にあり、漁業を主としていた。内乱時代には人々はジャングル、ブアなどに居住、1962年ごろに帰村した。60年代にタナトラジャからの入植者があり水田を開いている。現在その数は30世帯ぐらい。また、ブギス族が伐採に従事するため一時来住した。村は四つの集落より成るが、このうちマリオ村 (Desa Mario) との境界近くのラレラレ (Lare-Lare) が開拓集落である。主食はサゴと米であるが、現在では後者の方がより重要である。インドネシア独立時の村人口は700人ぐらい。1968年1,112人。1973年から人口増加が目立ち、80年末には1,961人。

(7) マリオ村 (Desa Mario)

カランカランガン村の南に接し、以前は二つの集落より成っていたが、現在は四つの集落がある。マリオ (Mario) が最も古い集落である。内乱時住民は山にこもったという。最も新しい集落はパレカジュ (Parekaju) で、1966年に開かれ水田耕作を主としていたが、2、3年前からカカオ園、丁字園をも開いている。開拓民は土着民50%のほか、タナトラジャからの移住者25%、ブギス族25%を含む。以前はサゴが主で米が従であったが、1973年以来米が主となったという。1968年末の人口は834人。80年末の人口は2,347人。出稼ぎに行く者は比較的少なく、マレーシア、西イリアンなどに10人ぐらいが出ている。

(8) ティロワリ村 (Desa Tirowali)

ブアと並ぶこの地域の小中心ポンラン (Ponrang) をはじめとする四つの集落より成る。内乱時には住民は海岸側および山側のジャングルに住んだ。パダンサッパ村 (Desa Padang Sappa) との境界近くに位置するカンポン・ルラ (Kampung Lura) にはやや土地

の余裕があり、1965年にはタナトラジャから、また1978年にはジャワ族の入植者があり、水田、野菜園を開いている。現在彼らは集落人口に対してそれぞれ10%、5%を占めている。ポンラン地域では主食は現在でもサゴである。住民は米を好むが灌漑用の水がないので、山側に陸稲畑が少々あるのみである。1968年末の人口1,677人は、80年末に3,224人に達している。内乱時には、ジャカルタ、カリマンタン、マレーシアなどへ行った者がある。

(9) パダンサッパ村 (Desa Padang Sappa)

住民は以前はロア (Loa) およびサロロ (Salolo) の二つの漁業集落に住んでいた。1955～65年は内乱のため無人となったが、それ以前の人口は約500人であった。ポンラン近辺の土着民、トラジャ族やブギス族などの来住が多く、人口は1965年の約2,500人から68年末の4,611人を経て、78年末には12,671人に達した。その後ブギスの一部が去ったため、80年末人口は11,839人に減少した。現在の人口は土着民75%、トラジャ入植者15%、ブギス族10%より成る。開拓前はサゴが多く、主食はサゴであったが、現在は米にかわっている。¹⁾

(10) バクティ村 (Desa Bakti)

パダンサッパ村の南に接する海岸沿いの村で、住民は土着民のみである。内乱時にはすべての人々はジャングルに住んだ。主生業はコブラ生産で、10数年前から水田が開かれ、また陸稲栽培も少々ある。主食はサゴと米である。1968年末人口は3,299人、80年末人口は6,623人である。

(11) ジェネメジェ村 (Desa Jene Maejæ)

1) パダンサッパ村の農業については、本特集号所収の田中報告を参照されたい。

現在六つの集落より成る。このうち二つの集落は、土着民やトラジャ、ブギスの入植民によって1965年と73年とに開かれた。以前はサゴが主で陸稲が従であったが、1960年代より米が主となった。1952～63年の間は住民はジャングルにひそみ、夜間にサゴをとりに来たという。1968年末人口2,109人、1980年末人口5,937人。

(12) ノリン村 (Desa Noling)

ブアポンラン郡の最南端内陸部に位置し、六つの集落より成っていたが、内乱中の50年代に家屋は道路沿いに移された。1968年末人口は542人であったが、1980年末には3,524人となり郡内最高の人口増加を示した。これは1972年以来、ワジョ、ソッペン、シドラップ (Sidrap)、タナトラジャ、エンレカン (Enrekang) などからの入植者を受け入れたことによる。現在の住民構成は、土着民35%、ブギス族55%、トラジャ族10%である。サゴ、陸稲、水稻、とうもろこしが主作物であったが、現在ココヤシ園開発を含む各種のプロジェクトが進行中である。

表8 Desa Noling の人口 (1968～80)

年次	成人		子供		総人口			性比
	男	女	男	女	男	女	計	
1968年末	105	112	134	191	239	303	542	0.79
1969年末	89	97	110	118	199	215	414	0.93
1970年8月	175	158	136	118	311	276	587	1.13
1971年末	288	276	222	190	510	466	976	1.09
1972年末	812	569	50	51	862	620	1,482	1.39
1973年末	849	662	111	153	960	815	1,775	1.17
1974年末	860	675	136	169	996	844	1,840	1.18
1975年末	831	692	151	182	982	874	1,856	1.12
1976年末	764	600	660	583	1,424	1,183	2,607	1.20
1977年末	747	606	554	563	1,301	1,169	2,470	1.11
1978年末	758	719	635	639	1,393	1,358	2,751	1.03
1979年末	775	773	625	630	1,400	1,403	2,803	1.00
1980年末	947	927	869	781	1,816	1,708	3,524	1.06

Bua Ponrang 郡役所の登録人口資料による。

1968年以降の人口を性および成人・子供別に示すと、表8のごとくとなる。72～75年の4カ年については子供の定義が他の年次と異なっていると判断され、細別された数値はこのままの形では通時的な比較に用いることができない。しかし、このような数値からでも72年における性比の上昇は明瞭である。このような男子優勢は一時低下の傾向を示しつつ76年に再び上昇し、さらに低下して1979年に男女同数に至るのである。

IV ムシ川下流部のブギス開拓民の事例

南スマトラ州のムシ川下流部にブギス族の移住が始まったのは1964年である。これらのブギス族の多くは南スラウェシのボネやワジョの出身であるが、特に初期の来住者に関しては、スラウェシの居住地から直接ムシ川にきたわけではなく、ジャンビ州あるいはリアウ州における相当期間の定着経験者といえる。彼らは南スラウェシの内乱をこれらの前住地に避けていたが、ムシ川下流部に適地があることを知って移住してきたのである。

ムシ川下流部ではブギス族たちはパサンスルット (pasang surut, 潮汐灌漑) により稲作を行い、また一部の者はココヤシ栽培への発展を図っている。彼らがここで採用している稲作技術は、湿地林を伐採して焼き、1メートル幅くらいの溝を河岸に直角に掘って潮の干満につれて水が出入りするようにして水稻を育てる方法である。²⁾ この種の耕作法で利用された土地は、リアウの土着民の場合には3年ほど連作したのちに休閑期をお

2) ムシ川下流部の稲作方法については、『東南アジア研究』17巻3号、1979 (特集「南スマトラ」) 参照。

くが、ブギス族の場合には雑草を懸命にとることによって耕作の努力を続けるという。土着の行政村マルガ (marga) の長パシラ (pasirah) から認められた耕作面積が一耕作者あたり2～3 ha であることが、このようなインテンシブな耕作法を採用する一つの理由となっている。

今回の調査期間中に、南スマトラ州のスリウィジャヤ (Sriwijaya) 大学農学部 of ルクマン氏 (Ir. Lukman Hakim Taslim) の協力によって、1978年に実施した「南スマトラ、

表9 ムシ川下流部のブギス集落概容 (調査10集落について、1981)

集 落 名	所 属 マルガ	入植 時期	初期来住者の 出身地/経由地	初期人口		現在人口	
				男	女	男	女
1. Padaelo	MP	1973	Wajo/Jambi	9	6	256	268
2. Sungai Senang	MP	1972	Wajo/Jambi	8	4	3,164	
3. Sungai Cawang	MP	1972	Wajo/Jambi	3	2	2,506	2,117
4. Sungai Buluh	U	1974	Bone/Sungsang	173		126	122
5. Sungai Mengkuan	U	1971	Bone/Sungsang	16	14	145	103
6. Sungai Semut	S	1965	Bone/Sungai Lilin	7	5	156	159
7. Parit Prajen	S	1964	Bone/Riau	30	20	312	214
8. Teluk Payo	S	1965	Bone/Jambi	8	5	734	631
9. Parit Lapis	MT	1972	Bone/Sungsang	11	7	629	486
10. Parit Tujuh	MT	1972	Wajo/Sungsang	3	3	75	67

マルガ名 MP:Muara Padang, U:Upang, S: Sungsang, MT:Muara Telang. インタビューによる資料収集は Ir. Lukman Hakim Taslim (スリウィジャヤ大学農学部) による。

コムリン川流域およびムシ川下流部における集落形成史」[坪内 1979; Tsubouchi 1980] に関する調査³⁾の補足データを手に入れることができた。このデータはムシ川下流部から選ばれた10個のブギス族集落の長とのインタビューから得られたもので、各集落の入植年次、入植初年の人口構成、および現在人口を含む。調査集落の分布とおのおのの概容は図3 および表9のごとくである。入植初年の人口構成を、この情報が得られた八つの集落について一括して示すと、表10のごとくとなる。25～39才の既婚男子を中心として、これに彼らの妻子のうち同行可能なもの、およびやや若い年齢層の独身男子が加わって開拓初期人口を構成する。子供を加えた平均年齢は男子26.1才、女子19.6才である。男子では50才以上の者、女子では45才以上の者が皆無である。全年齢における性比1.519、労働力人口 (15才以上) における性比は1.909ときわめて高い。

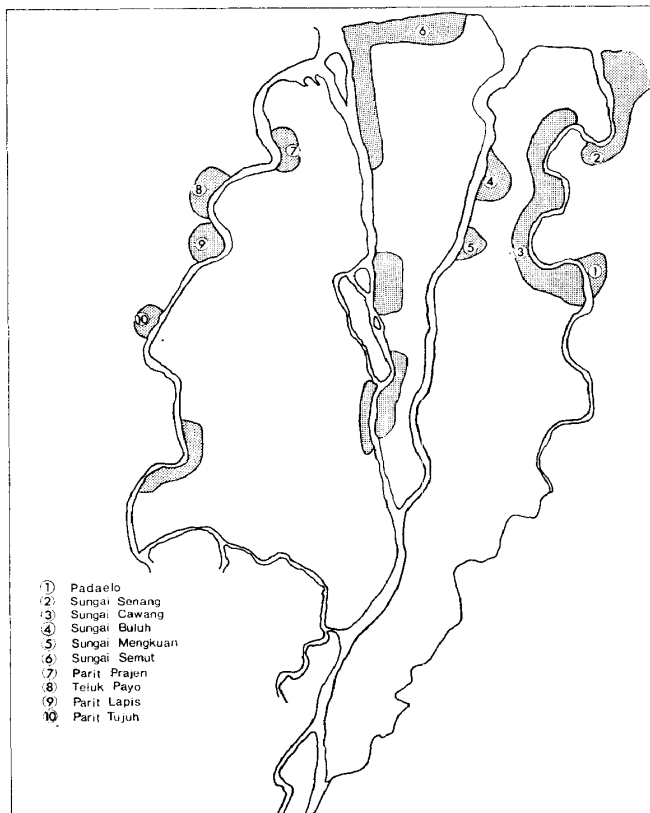


図3 ムシ川下流部のブギス族集落

3) 同調査は、1978年9月から1979年2月にかけて文部省海外調査費によるスマトラ調査の一部として、スリウィジャヤ大学の協力を得て行われた。

表10 ムシ川下流部の8ブギス集落における初期来住者の来住初年の性・年齢構成

年 齢 階 級	男	女
0 ～ 4	7	4
5 ～ 9	4	7
10 ～ 14	5	8
15 ～ 19	7	7
20 ～ 24	7	9
25 ～ 29	14	9
30 ～ 34	12	6
35 ～ 39	16	1
40 ～ 44	5	1
45 ～ 49	2	0
計	79	52

Padaelo, Sungai Senang, Sungai Cawang, Sungai Semut, Parit Prajen, Teluk Payo, Parit Lapis, Parit Tujuh に関するデータ。

現住人口においては、判明する9集落の合計人口の性比は1.185と、開拓当初に比してかなり低下を示すものの、なおかなり高い値を持続している。集落別にみると性比には0.955から1.458に至るばらつきがあるが、これは集落設立年次とはほとんど関係しない。若干の集落がその立地条件などのため連続的に移住者を受け入れていることが、このような高い性比を保つ原因の一つになっているように思われる。

V お わ り に

以上の断片的な資料から得られた南スラウェシ住民の移動にともなう性比の特性を基礎として、その位置づけに関する今後の問題の指摘をしておきたい。

まず、南スラウェシ住民における移住行動の異同が検討されねばならない。事例研究における移住民の中にはルウの土着民、ブギス族、トラジャ族が含まれる。この場合のトラジャ族は主としてタナトラジャ県出身であるが、その中心地ランテパオ (Rantepao) で

は近年顕著な人口流出がみられる。この流出の特徴は残留人口における性比が比較的高いことである。ルウ県におけるトラジャ族の入植は内乱の終結と同時に開始されており、すでにかかなりの年数の経過があるため、初期の人口構成が不明で、現在の時点ではトラジャ族の入植地において特に高い性比が存在するとはいえない。ブギス族とトラジャ族の移動の構造が男女の動きに関して異なる可能性はさらに検討されねばならない。

ブギス族の男子中心的な移動については、次の2点の並存を指摘しておきたい。第1に彼らの間には、男だけの出稼ぎが存在する。これは伐採、船乗りなどの労働者的な性格をもつ仕事を含む。このような移動が出身地との関係において人口の周流か離脱かを見きわめることは今後の課題である。第2は女性の後続をともなう移動である。この場合には高い性比は一時的に過ぎず、やがてバランスがとりもどされる。これら二つの移動パターンは本論では開拓前線において見出された。都市移住においても同様のパターンがみられるかどうかはさらに検討を要する問題である。

男子中心型と名づけるべき地域間移動のパターンは、インドネシアにおいてはブギス族のみにあって顕著にみられるのか、あるいは、かつてはジャワ族においてもみられたもので、どの種族においても同様の歴史的変化をたどって移動時における性比のバランス化が出現してくるのか、というのは興味深い問題である。都市における西スマトラ出身者の性比のバランス化は、かつて男を中心とした出稼ぎが変質化しつつあることを示唆している。ブギス族の場合、かつての海上活動が男子中心の移動の文化の形成に寄与したことは間違いない。このことが現在のブギス族の移動パターンとどの程度本質的に関係しているかをさぐることも一つの問題である。

残留者に関しても検討されるべき事項があ

る。特に性比の低下が顕著となっているブギス族の村落で、伝統的な生業・労働構造に変化が生じているのかどうか、あるいは、仕送りが男子不在の村落の活動性を奪いつつ生活を維持させているのかなど。

移動の性比の問題は、単に労働力の配置としてではなく、種族の文化的背景、および移動の結果としての文化的再適応の問題をも含んで、興味深い検討の対象となることを最後に強調しておきたい。

参 考 文 献

- Indonesia, Biro Pusat Statistik. 1974. *Sensus Penduduk 1971*. Seri E, No. 1-No. 26. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- . 1976. *Statistik Indonesia 1975*. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- . 1980. *Statistik Indonesia 1979*. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- Lembaga Kependudukan, Universitas Hasanuddin. 1975. *Laporan Penelitian Sebab-Musabab Out-Flow Penduduk Sulawesi Selatan*. Ujung Pandang: Universitas Hasanuddin.
- (Mimeographed)
- Sulawesi Selatan, Kantor Sensus & Statistik. 1973. *Sulawesi Selatan Dalam Angka Tahun 1972*. Ujung Pandang: Kantor Sensus & Statistik. (Mimeographed)
- . 1976. *Sulawesi Selatan Dalam Angka Tahun 1975*. Ujung Pandang: Kantor Sensus & Statistik. (Mimeographed)
- . 1977. *Sulawesi Selatan Dalam Angka Tahun 1976*. Ujung Pandang: Kantor Sensus & Statistik. (Mimeographed)
- . 1979. *Sulawesi Selatan Dalam Angka Tahun 1978*. Ujung Pandang: Kantor Sensus & Statistik. (Mimeographed)
- 坪内良博. 1979. 「南スマトラ、コムリン川流域およびムシ川下流部における集落形成史」『東南アジア研究』17(3).
- Tsubouchi, Yoshihiro *et al.*, eds. 1980. *South Sumatra, Man and Agriculture*. Kyoto: Project Team for "South Sumatra: Man and Agriculture," The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- United Nations. 1974. *Demographic Yearbook 1973*. New York: United Nations.
- . 1979. *Demographic Yearbook 1978*. New York: United Nations.